

〔研究ノート〕

浦上春琴筆「花卉・唐子遊図衝立」(倉敷山田コレクション蔵)の花卉図について

2016年に岡山県立美術館と千葉市美術館で開催された「文人として生きる—浦上玉堂と春琴・秋琴父子の芸術」展は、文人画家として著名な浦上玉堂の作品にあわせて、これまでまとまって紹介されることの少なかった長男の春琴と次男の秋琴の作品も多く展示した画期的な展覧会でした。先日この展覧会の図録を読み返していたところ、一点の春琴作品に目が留まりました。それが、「花卉・唐子遊図衝立」(倉敷山田コレクション蔵)です。衝立の一面は唐子遊図で、盥の水の中に泳ぐ魚を見て遊ぶ五人の唐子たちが描かれ、もう一面は花卉図(図1)で、様々な花の折枝が描かれています。花卉図の面に「壬申春三月上澣寫／春琴寫」と年紀があることから、文化9年(1812)、春琴34歳の時の作であることが分かります。

この作品に目が留まったのは、花卉図に描かれる花々の形に見覚えがあったためです。『美のたより』179号(2012年)掲載の研究ノートにおいて、田能村竹田筆の「沈香亭余紅図・梅花芙蓉図」(大分県立芸術会館蔵、文化5年[1808]、図2)と「四季花鳥図」(大分市美術館蔵、文化6年[1809])に描かれるいくつかの花が魯治筆「百花図巻」(広東省博物館蔵)に描かれる花と酷似していることを指摘しましたが、この春琴の花卉図に描かれる花も魯治筆「百花図巻」の花の姿(図3)とよく似ているのです。特に類似性が

高いのが、椿(図4)、水仙(図5)、黄蜀葵、白木蓮で、花卉の角度や葉の位置まで共通しています。また、枝ぶりは少し異なりますが、石榴花も類似しています。

魯治は16世紀半ば頃に中国・蘇州で活躍した画家です。当時蘇州では呉派と呼ばれる文人画家たちが活躍しており、魯治も呉派と関わりが深い画家でした。様々な花の折枝を描いた魯治の百花図は人気があり、魯治やその周辺の画家によっていくつもの作品が描かれたようです。竹田は、魯治筆「百花図巻」(広東省博物館蔵)に大変よく似た類本で、日本にもたらされた作品を目にしたのではないかと考えられます。竹田の山水図については、呉派からの影響がしばしば指摘されますが、花卉図や花鳥図においても呉派の作品に学ぶことがあったことを『美のたより』179号(2012年)と、記述を増やした『大和文華』130号(2016年)で論じましたが、春琴も同じ魯治筆「百花図巻」の類本を見ていた可能性が高いと言えます。

竹田(1777～1835)と春琴(1779～1846)には親しい交流があり、竹田は春琴のことを「相ひ識ること最も久しく、造訪するごとに必ず信宿す(長い付き合いで、訪問すると連泊する)」と述べています(『竹田莊師友画録』)。両者ともに中国の詩書画に造詣が深く、たとえば春琴所蔵の中国絵画で、呉派の大家・文徵明の青緑山水の流れを引く何驥遠

筆「春江晴図巻」(個人蔵)を竹田も鑑賞して跋文を寄せるなど、お互いのネットワークを通じて中国絵画の情報を集め、学習を深めていました。魯治筆「百花図巻」の類本についても情報を共有し、それぞれに学ぶ機会があったのではないかと考えられます。花の取り合わせや配置、彩色などには、竹田と春琴、それぞれの工夫を見ることができます。

広東省博物館蔵の魯治筆「百花図巻」には、31種もの多くの花が描かれていますが、竹田や春琴の作品に取り込まれたのは5～8種ほどのみで、その中には重なる花が多いことから、二人が目にしたのは、広東省博物館蔵の魯治筆「百花図巻」によく類似するものの、花の種類の少ない類本であったのではないかと考えられます。先述のように春琴筆「花卉図衝立」の石榴花は、広東省博物館蔵の魯治筆「百花図巻」の石榴花と類似するものの少し枝ぶりが異なりますが、竹田筆「沈香亭余紅図」の石榴花の枝ぶりとはほぼ同一となっています。このことから、竹田や春琴が目にしたのは、広東省博物館本そのものではなく、その類本であった可能性が高いです。

竹田作品が描かれた文化5～6年、春琴作品が描かれた文化9年は、それぞれの画業の前期にあたります。竹田と春琴は日本の文人画家の中でも花卉図を得意としており、両者ともに山水図と比べ低く見な

されがちな花卉図を、呉派の画家の作品などを例に挙げながら評価する言葉を残しています。竹田や春琴の花卉図には、俣南田など他の中国画家からの影響も考えなければなりませんが、呉派の花卉図の系統に連なる魯治筆「百花図巻」の類本を早い時期に学んだことが、自らの画業に花卉図を積極的に取り入れる契機の一つになったのではないのでしょうか。

さらに、春琴筆の「花鳥図屏風」(東京国立博物館蔵、文政6年[1823])にも、「花卉図衝立」に描かれた花の姿を思い起こさせる、手前の花びらを短縮法的に表した椿や、俯くように斜め下を向く黄蜀葵が描かれています。この下を向く黄蜀葵は春琴筆「四時草花図」(文政10年[1827])にも見られます。黄蜀葵は、春琴と近い時代に活躍した円山四条派や江戸琳派の作品にもしばしば描かれていますが、下を向く姿が定番というわけではありません。「花卉図衝立」において魯治筆「百花図巻」の類本より取り入れた花の姿が、一つの理想形として春琴の中に長く生き続けていたことが窺えます。

(宮崎もも)

※図1・4・5は『文人として生きる 浦上玉堂と春琴・秋琴 父子の芸術』(岡山県立美術館・千葉市美術館、2016年)、図2は『大和文華』130号(2016年)、図3は『明清花鳥画』(広東省博物館・香港中文大学文物館、2001年)より複写しました。



図1 春琴 花卉図衝立
倉敷山田コレクション



図2 竹田 梅花芙蓉図
大分県立芸術会館



図3 魯治 百花図巻部分
広東省博物館



図4 図1部分



図5 図1部分